

ご主人様

momomilk

私には、ご主人様がいます。
いつも、私を愛してくれます。

毎日毎日、私のアソコにご主人様の突起物を入れてくれるのです。
そうされることが一番の幸せなのです。

それから、ご主人様は優しいので、いつもきちんと自分の突起物をコンビニで買ってきたアレを装着して、私のアソコが汚れないように気を使ってくれます。

気になることがあって、なぜかベッドでは私のアソコに一度も入れてくれないのです。たまには、お風呂と一緒に入り私のアソコやその周りを洗ってくれます。

私は本当に幸せものだったのです.....

しかし.....

そんな幸せも束の間でした。

汗ばむ季節になるころ、私のアソコにあまり入れてくれなくなりました。たまに、入れてくれても、生で入れるという卑劣なやり方で...

私は、本当に切く悲しい想いでいっぱいになりました。

私はもういらないだろうか？

もう飽きたんだらうか？

捨てられるんだらうか？

私以外で、入れたり、抜いたりしているんだらうか？そう考えると悲しくてたまりません。
そして、私は来る日も来る日も、ご主人様のことを考えて過ごしました。

暑さも少し落ち着き、秋になろうするころ、
徐々に、ご主人様は私に入れてくれる回数が増えてきたのです。

やっと私のご主人様が戻ってきました。

そして、ご主人様が、ゆっくりと私のアソコの中に入れてながら私にこう言いました。

.

「やっぱり、これが一番、履き心地がいいな」

そして、ご主人様はドアの扉を開けた...

END